まなびや

学制一五〇年記念企画展の見どころ

幕末期　寺子屋・藩校での学び

▼近代教育のはじまり

明治新政府は富国強兵・殖産興業のスローガンのもと、近代国家建設を進めました。

教育面では国民の知識を高めて産業を発展させることが求められました。一八七一(明治四)年七月、明治政府は教育行政を担当する機関として文部省を設置し、直ちに全国民を対象とする教育制度「学制」を作る準備を始めます。

そして、翌年の一八七二(明治五)年八月、政府は「国民皆学」を打ち出し、学制を発布しました。

▼学校の建設

学制が出された当初は、多くの学校が最寄りの寺院や家などを仮校舎としていました。校舎の建設は町村負担であり、自分のために学ぶのだからという理由で授業料も徴収されました。しかし、次第に教育の必要性が理解されてくると、地域住民や有力者の寄付などにより、徐々に新築の校舎も建設されるようになりました。

龍翔小学校・校舎模型1915(T4)年(現三国南小学校)

▼掛図での指導

寺子屋が個別指導であったのに対して、学制の下で作られた小学校では、多くの児童を一斉に指導する方法がとられました。そして、アメリカの初等教育で掛図が用いられていたのをまねて、一八七三(明治六)年、日本でも東京師範学校が編集した掛図が使われるようになりました。

▼体育のはじまり

明治政府は国民の体格・体力向上を目的に小学校の教科に「体操」を取り入れました。当初は授業の合間に体の弱い男児と女児が行うものとされました。一八八六(明治19)年に必修になると、木製の亜鈴や球竿・棍棒などを用いた軽体操があり、楽しく体を動かしました。

【左図】新板器械体操之図　歌川国利作(明治中期)　当館蔵

明治中期に県内で使われていた、木製の亜鈴(当館蔵)

博物図第二図　１８７３(明治６)年